

はじめに

茨城キリスト教大学
学長 瀧野修

2005年度、本学は初めて「学生による授業評価」を全学的に実施した。これは数年来行っている大学の自己点検・評価作業の一環として位置づけられるものである。そして、高等教育・研究機関としての大学が果たすべき社会的使命 教育研究水準の維持向上や、時代と社会の要請への積極的対応など の達成のためには、まず何よりも大学自らが《自らを知る》必要性を認識すること、そこに自己点検・評価の意義があると言える。とりわけ、大学教育の質の検証は焦眉の急であり、また今後も恒常的になされなければならないことである。もちろん、「学生による授業評価」のみが教育の質の検証となるものではないが、有効な方法の一つであることは確かである。

昨年度、三学部の教授会が「学生による授業評価」実施を決定した際、その主旨を全教員に向けて公表した『学長見解』の一部をここに再掲する。

授業という教育の場において、教員は《教える側》であり、学生は《教えられる側》であるという「一般的な」固定的図式の上に安住し、私たち教員は学生の学習成果を評価する権利と義務の遂行のみに意を尽くしてきたのではないが。《教えられる側》の学習意欲・学習態度そしてその成果は《教える側》の教員によって評価されるにせよ、《教える側》の教育内容や教育方法などは《教えられる側》によって評価されることはなかった。そのような、教育の場における一方通行的な評価システムが、ともすれば授業の硬直化や学生の学習意欲の後退を招来してきた遠因の一つかもしれない。「学生による授業評価」を実施することにより、自らがシラバスに掲載した教育目標および教育内容が実際の授業の中でどの程度実現できたかを知ることは、教員自身にとっても今後の教育改善のためには必要不可欠であることを自覚したい。

今、ここに2005年度の授業評価結果が報告書として纏められた。この《教えられる側》からの授業評価結果を《教える側》がどのように受け止めるのか、そして次の授業にいかに関与し、授業改善の一助とするか、《教える側》に課された課題は大きい。授業における相互評価という新たなシステムの目指すところは、教員と学生が共に授業の質と価値を高めることにあり、教育の場における評価の双方向性、つまりは《学び》のダイナミズムを保証することである。本報告書が、教員個々人のみならず、教員集団としての学科あるいは所属学科の枠を越えて教科を同じくする教員集団に求めているものは、個々の授業に関する不断の点検・評価、さらには授業改善の努力や教育方法の開発であるだろう。学生による授業評価の有効性に異論を唱える向きもあるだろうが、まずは学生の声に真摯に耳を傾けることから始めたい。

目 次

はじめに

． 学生による「授業改善のためのアンケート」実施について	
1． 経緯と実施計画	3
1) 実施にいたるまでの経緯	3
2) 実施計画	3
3) 実施計画の補足説明	7
2． アンケート様式	10
． 実施状況	
1． 実施時期	13
2． 実施教員数	13
3． 実施授業コード数	13
4． 自由記述のあった科目数	13
5． 回答率	13
． 「授業改善のためのアンケート」結果の概評	
1． 大学全体の結果について	17
2． 学部別の結果について	18
3． 履修区分別の結果について	19
4． 各学科の学年別の結果について	22
5． 教員所属別の結果について	22
6． 受講生数別の結果について	24
7． 設問 とその他の設問との関連性について	25
． 学部長による教員報告書への概評	
1． はじめに	29
2． 方法と結果	29
1) 問『 - 1 』 についての結果	29
2) 問『 - 2 』 についての結果	31
3) 問『 』 についての結果	33
3． 報告書への概評	34
1) 教員の改善努力すべきこと	34
2) 大学として改革すべきこと	34
3) 学生が抱える問題	35
4) 授業評価の方法	35
5) 授業改善のシステム	35
6) 教員の評価	35
7) 評価に関わるコストと効用	35

資料編	
1. 学部別の平均値・中央値・標準偏差	39
2. 履修区分別の平均値の度数分布表	42
3. 各学科の学年別の結果	48

. 学生による授業評価のためのアンケート実施について

1. 経緯と実施計画

本学の学則第 66 条には「本学の教育研究水準の向上を図り、本学創設の目的および社会的使命を達成するため、教育研究活動の状況について本学は自ら点検および評価に努める」とある。これを実施するために本学は数年来、「自己点検・評価運営委員会」を中心に、『茨城キリスト教大学の現状と課題』と題した報告書の作成(2003年3月刊行)などを行ってきた。2005年度に初めて実施した「学生による授業評価」はこの点検作業の一環である。

以下、1) 実施にいたるまでの経緯、2) 実施計画、3) 実施計画の補足説明という順で報告したい。

1) 実施にいたるまでの経緯

2003年3月に刊行された報告書は、《教える側》の教職員による本学の自己点検・評価作業を集約したものだ。これに加えて、《教えられる側》の学生による大学評価が不可欠であるという認識から、本学学長は2005年4月の三学部合同教授会において「学生による授業評価」の実施を提言し、教授会はこれを受け入れた。学生による大学評価の対象となるべきものには、本来、授業だけではなく、事務組織やそこでの対応あるいは厚生施設の有様なども含まれるべきなのだが、まずは学びの中核に位置している授業の質の点検を優先的に行なうことになった。

教授会における決定を受けて、学長は「授業評価委員会」(以下、「委員会」)を設置し、委員を指名した。この委員会は、授業評価のやり方を立案するとともに、実施に当たってはその運営もするという、マルチ機能を担う委員会である。そこで委員会はまず、学生による授業評価の方法、実施時期と実施方法、実施結果の活用等について、4月半ばから週一回のペースで鋭意協議を重ね、5月30日に合同教授会の場で中間報告を行ない、6月28日に「授業評価の実施についての委員会見解」を三学部長宛に提出した。またこれと平行して、実施に関わる業者との折衝も行ない、限られた時間の中でかろうじて準備を整え、2005年度前期終了科目についての評価実施にこぎつけた。

前期終了科目の評価実施の後、夏季休暇中の集中講義、そして後期終了課目ならびに通年科目の評価実施を行なった。すべてが終了したのは2006年2月だった。

2) 実施計画

三学部長に提出した「授業評価の実施についての委員会見解」をここに収録したい。これが「実施計画」に当たる。

2005年6月28日

文学部長 高橋 教雄 殿
生活科学部長 真鍋 守栄 殿
看護学部長 山崎 京子 殿

授業評価委員会
銭谷秋生（委員長） 坂江千寿子
渡辺敦子 細谷瑞枝 池内耕作

授業評価の実施についての委員会見解

本委員会は、授業評価の実施方法ならびに調査結果の開示や活用方法について、その枠組み案を作るために議論を重ねてきました。委員会見解がまとまりましたので、報告いたします。

1. 授業評価の実施方法
 - ・ 受講生が、(1)当該授業についてのアンケート項目に答える、(2)当該授業の改善点について提案があれば自由に記述する、という形をとる。
2. 学生と教員への告知
 - ・ 実施に先立って、授業評価の趣旨・方法等を学生ならびに兼任講師を含む全教員に告知する。学生に関しては、今年度は掲示とプリントの配布によって、次年度以降は履修ガイダンスの場でのプリント等の配布によって、これを行なう。教員に関しては、毎年プリントの配布（英訳を含む）によってこれを行なう。
3. 評価対象科目
 - ・ 原則として全科目を対象とするが、今年度は、前期科目のなかで調査時期にすでに終了している1単位科目を除くこととする。また、教育実習や看護学科の病院実習などの校外実習科目は、今年度に限らず、除くこととする。
 - ・ オムニバス科目は1科目1調査で実施する。
4. 実施時期
 - ・ 前期終了科目は前期最終週（今年度は7月11日（月）～7月16日（土）の期間）に実施する。
 - ・ 後期科目ならびに通年科目は後期最終週（今年度は1月13日（月）～1月19日（水）の期間）に実施する。
 - ・ 集中講義科目はそのつど最終回に実施する。
 - ・ 最終週を休講にする場合や補講を行なう場合は、その前後の週に適宜実施する。
 - ・ 次年度以降、1単位科目についてはその最終回に行なう。
5. アンケート用紙の配布・記入・回収方法

- ・ アンケート用紙は各科目ごとに袋詰する。教員は自分の科目用の袋を教室に持参し、授業が終了する 20 分くらい前に受講者に用紙を配布する。
- ・ その際、回収の任に当たる学生を指名し、かつその氏名等を控えておく。配布が終わったところで教員は退室する。用紙は指名された学生が回収し、所定の場所に届ける。
- ・ 所定の場所は、教務課窓口とする。ただし窓口が閉まった後は、窓口近くに置いたボックスに入れることとする。回収に間に合わなかった用紙もボックスに入れてもらう。
- ・ アンケート用紙には科目ごとに「授業コード」を記入することになるので、学生は各自、授業コードを記した「履修登録確認票」を持参する。教員は、必要があれば、回収袋のラベルに記された授業コードを板書する。（複数看板科目が多いので、混乱を避けるために、教員には予め担当科目の授業コード一覧表を配布する。

6. アンケート項目

- ・ この調査は授業の改善に資することを目的としている。そこで、授業の現状が正確に把握できるように質問項目を厳選した。それぞれの項目は以下の諸問題を念頭において選ばれている。 授業担当者の教員としての姿勢や能力に関わる問題。 授業運営や教授方法の工夫に関わる問題。 学生の権利の遵守に関わる問題。 学習環境の整備に関わる問題。
- ・ 質問事項ではうまくすくい取れない受講者の声を聞き取るため、自由記述欄を設けた。（そこへの記述内容は集計の段階でコンピュータに入力し、受講者の筆跡等が残らないようにする。）
- ・ 受講者は所属学科を記すが、氏名の記入はしない。
- ・ 質問には 5 段階評価で答えることとする。

【アンケート項目】

- (1) この授業に対する教員の熱意・意欲を感じましたか？
- (2) 教員のこの授業での準備・下調べは充分だと思えましたか？
- (3) 教員はこの授業について、学生の質問や相談にのる姿勢をもっていましたか？
- (4) この授業の内容は、ほぼ、履修要覧や一回目のガイダンスどおりのものでしたか？
- (5) この授業では、毎回、テーマが明確に立てられ、そこへ向けて筋道のおった展開がなされましたか？
- (6) 教員の説明や指導は、内容の難易度にかかわらず、理解や習得がしやすいように工夫されていましたか？
- (7) この授業は、あなたの知識や技術の向上あるいは視野の拡大につながりましたか？
- (8) 教員は静かな環境で勉強できるよう、私語を注意するなど、配慮していましたか？
- (9) 教員の言動は、学習意欲を損なうことのない適切なものでしたか？
- (10) この授業のクラスの規模は適切でしたか？

(11) この授業にあなたはどれくらい出席しましたか？（この質問については%で聞く）

100～80% 79～60% 59～40% 39～20% 20%未満

(12) 予習や復習あるいは質問や発言などを通して、積極的にこの授業を理解するよう努めましたか？

<総合評価>

(13) あなたのこの授業に対する総合評価（満足度）を示してください。

<自由記述欄>

この授業の改善点について提案があれば書いてください。

7. 集計

- ・ 回収したアンケート用紙は、業者に送り集計してもらう。
- ・ 集計作業は次の枠組みに沿って行なわれる。
科目担当教員に渡る資料に関して
 - ・ 設問項目への回答数（%で）、それぞれの項目に関する大学全体の平均値、これらと比較できるグラフ、自由記述欄のデータ、その科目の平均値（授業の評価なので、アンケート項目の(11)(12)を除いた点数の平均値）。
 - ・ さらに細かく各教員が自分の位置を確認できるように、各項目の(a)学部別平均値、(b)学科別平均値、(c)全学部共通科目の平均値、(d)生活科学部と看護学部に関しては「学部基礎科目」群の平均値、(e)資格科目群の平均値、(f)それぞれのカテゴリーにおける最高点と最低点ならびに標準偏差。
小冊子作成のために
 - ・ 専任教員と兼任講師の平均値の相違
 - ・ クラスの人数による平均値の相違（50名以下、51名から99名まで、100名以上）
 - ・ 項目13（総合評価）とその他の項目との相関分析

8. 開示と分析

- ・ それぞれの項目の大学全体の平均値、【7】に列挙した(a)から(f)までの集計結果、同じく【7】の に列挙した集計結果は、全教員に開示する。また同じものを、評価機構にも、さらに大学ホームページなどを通じて学生や一般の方々にも、開示する。
- ・ 各教員の個人データは、原則として、公開しない。（業者が厳封した封筒を各教員のメールボックスに直接投函する。）ただし、次の【9】において提案するように、学部長のみ必要に応じて個人データを閲覧できる。
- ・ 評価機構に提出する書類に授業評価についての記述を載せることになるが、それとは別に、今年度は調査結果の報告と分析を記した小冊子を作る。

9. 活用

授業評価は、本学が提供している授業の質を高めるために、大学の費用を使い、貴重な授業時間の一部をさき、全学生の協力を得てなされるものである。したがって、学生による評価に対して大学として責任ある対応をする必要が

ある。してみれば、＜評価結果を個々の教員に返し、あとは個々の教員の創意工夫に任せる＞というだけでは、大学として十分に責任をとることにはならないと考えられる。改善点を指摘されても授業への取り組みについて何ら工夫をしない教員がいたとして、それは専門職にある教員個々人の問題だからと言って済ますわけにはいかない。あるいは、クラス規模などの問題点が指摘されていても大学として対応しない、というわけにもいかない。

もちろん、学生による評価（特に自由記述内容）には無責任なものも含まれている可能性があり、その全てに大学が応える必要があるとは言えないだろう。しかしそれにしても、学生の声に真摯に耳を傾ける努力はすべきだろう。そこで、本委員会としては、次の提案をしたい。

各教員が評価結果に対して誠実に対応することは当然のこととして、さらに各教員（専任教員に限る）は評価結果についての応答文を提出し、それに学部長が目を通す。（応答文のフォーマットを作ることとも考えられる。）

学部長は、応答文に記されたクラス規模などの問題（教員の工夫の範囲を超える問題）について、適宜対応する。

学部長は、大学全体の平均値よりもかなり低い平均値（2点未満を目安とする）となった科目については、その担当者と授業運営についての話し合いをすることができる。（2点未満の科目のデータは、厳封の上、業者から直接学部長宛てに送られるようにする。）

兼任講師の科目についても、2点未満を目安として、適宜対応する。

10. 委員会について

本委員会は、本学における授業評価の実施方法や調査結果の活用方法等について枠組みを作ると共に、実施初年度の運営主体として活動することを目的としている。したがって、今年度の調査が終わり、調査結果の分析等の責任を果たし終えたところで解散としたい。次年度以降、新たな運営主体を組織する必要がある。その構成メンバーは、各学科から教員1名、共通科目等運営組織から教員1名、教務部職員1名という形にするのがよいと思われる。

3) 実施計画の補足説明

授業評価の実施方法について

学生による授業評価の方法には大きく二通りの方式が考えられる。一つは、学生が適当なタイミングに自分が履修している科目のリストを受け取り、それぞれを評価項目ごとに評価して提出する方式である。この方式を学内LANを用いて実行すれば、授業評価に費やすべき労力は非常に少なくなる。しかしこの方式には、回収率の確保が難しいこと、システムの構築に費用や時間がかかること、そして学生の入力スキルに不安を残すことなどの難点があり、委員会では採用しなかった。そこで、科目ごとにアンケート用紙を配布し回収するといういま一つの方式を採用した。

自由記述欄の設定に関しては、そこに教員を誹謗中傷する記述や無責任な記述が書き込まれる可能性があるため、慎重に議論を重ねた。その夥しい事例は、様々な大学から報告されている。しかし、授業を評価されるとはそう

いうリスクに耐えることでもあるので、敢えて設定することとした。また、自由記述欄には「改善点について提案があれば」という但し書きを添えることで、そのリスクを少しでも減らす工夫をした。あとは本学学生を信頼するしかないというのが、委員会の見解だった。

評価対象科目について

「原則として全科目を対象とする」としたが、その際逡巡したことの一つに、授業形態の相違をどうするかということがあった。例えば、講義科目と実習科目を同じアンケート項目で評価してもらうのにはやはり無理がある。（大学によっては、授業形態に応じてアンケート項目を変える工夫をしているところもある。）しかし、実施時期までに準備できることには限りがあること、授業評価が大学に定着した後で授業形態に応じた細かな配慮をしてもいいのではないかなどを理由に、このたびは共通のアンケート項目を用いることとした。

アンケート用紙の配布・記入・回収方法について

本学の短期大学部で独自に授業評価を実施していた頃は、アンケート用紙を科目ごとに袋詰めする作業が委員に多大の労力を費やさせた。そこでこのたびは、アンケート集計業者にその仕事を請け負ってもらうこととした。

学生がアンケート用紙に記入するときは担当教員には席をはずしてもらおうという提案は、教室内での教員の存在自体が学生にとって無言の圧力となる可能性を排除したかったからである。

本学では開講されている科目ごとに「科目コード」と「授業コード」が付されている。このうち後者をアンケート用紙に記入してもらうことにしたのは、「科目コード」が同じ科目でも a、b、c といったクラス分けがあり、担当者が異なる場合があること、複数看板科目には、それぞれのカリキュラムに応じた「授業コード」がふられていることなどの理由からである。

アンケート項目について

アンケート項目の決定に際しては、他大学の事例、本学学生からの聞き取り調査などを参考にしながら、そもそも何を知ることが授業改善に最も資することになるのかという点をめぐって慎重に論議を重ねた。学生自身の事柄を聞く項目を入れたのは、その他の項目との相関関係をみるためである。

集計について

自分の授業への評価が大学全体のなかでどこに位置するのかが各教員に分かるように、集計作業の枠組みを設定した。さらに、教員の責任に帰すことができない要因（例えば受講者数）が授業の評価にどのように反映するのも確かめうるように配慮した。

開示と活用について

大学によっては、授業評価の結果を担当教員の固有名を隠さずに Web 上で公開しているところもある。そこまで踏み込んだ開示を提案すべきかどうかについて委員会では幾度も議論を行なったが、結局このたびは見送ることにした。授業評価そのものが本学では初めての試みでありまだ定着していないことが差し当たっての理由だが、その他に、アンケート項目による評価がどの程度個々の授業の本質的な部分を捉えうるのかという点に関して、やはり

ためらいを覚えたからである。この問題については今後の検討課題としてほしいというのが、委員会の見解である。

評価の平均値が2点未満だった場合の措置についての提案は、「この場合は緊急を要するだろう」という理由から行なったものである。

. 実施状況

1. 実施時期

前期：2005年7月11日(月)～2005年7月16日(土)

後期：2006年1月13日(月)～2006年1月19日(水)

2. 実施教員数

	専任教員数	兼任教員数
大学全体	91人	95人

3. 実施授業コード数

	対象授業コード数	授業コード数	実施率
大学全体	1,626	1,555	95.6%

4. 自由記述のあった科目数

	対象科目数	自由記述のあった科目数	記入率
大学全体	937	687	73.6%

5. 回答率

1) 全受講生に対する有効回答率

	科目受講生数	回答受講生数	有効回答率
大学全体	41,404	33,785	81.6%

回答受講生は、欠席者、記載不十分な受講生を除いたものとした。

2) 出席率60%以上の受講生の有効回答率

	回答受講生数	出席60%以上の受講生数	有効回答率
大学全体	33,785	31,975	94.6%

・「授業改善のためのアンケート」結果の概評

1. 大学全体の結果について

2005 年度結果の三学部すべての科目を総合して概観した。大学全体（延べ 33,785 名）の数値としては平均値および中央値でも、4.20 以上であり高い評価を受けているといえる。標準偏差は 0.5 以下であり、3.70 から 4.70 までの間に対象科目の 90%以上が含まれることから、ばらつきの程度は少なく集約されていると解釈できる。学部別の結果は資料編に示した。

	大学全体
平均値	4.20
中央値	4.25
標準偏差	0.46

なお、ここでいう平均値、中央値、標準偏差は、アンケート項目の Q11、Q12 を学生個々の問題として除外し、Q1～Q10 と Q13、すなわち計 11 問の結果を基に算出している。

大学全体におけるアンケート 13 項目の結果について

アンケート項目に関する大学全体の結果は下記の通りである。設問項目のほとんどが 4.00 以上で、特に、Q1 および Q2 の「教員の熱意・意欲」、「教員の準備・下調べ」に関する学生の評価は高い。一方で、「教員の説明や指導の工夫」が 4.00 でやや低くバラつきの大きい結果となった。すなわち、教員の熱意は感じるものの、学生にとっては必ずしもわかりやすい授業になっていないといえよう。各教員が、各々の担当科目の内容の難易度を再評価し、どのように学生の理解度を把握し、理解度に合わせた授業方法を工夫するか、学生の要望として受け止め改善する必要性が示唆された。

設問 NO.	設 問 文	大学平均	中央値	標準偏差
Q1	教員の熱意・意欲	4.39	4.45	0.47
Q2	教員の準備・下調べ	4.27	4.42	0.61
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.22	4.32	0.57
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.20	4.26	0.49
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.18	4.28	0.54
Q6	教員の説明や指導の工夫	4.00	4.11	0.63
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.19	4.28	0.53
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.14	4.21	0.51
Q9	教員の適切な言動	4.19	4.29	0.58
Q10	クラス規模の適切さ	4.24	4.29	0.47
	Q1 から Q10 までの平均	4.20	4.29	0.54

また、学生の姿勢を問う質問 Q11 と Q12 の結果では、学生の出席率は高く、比較的熱心に授業を受けていた。一方で、「授業理解への積極性」では数値が低い傾向となった。学生の学習姿勢のどの部分が課題かを明確に意識できる設問が必要である。満足度は 4.00 以上で比較的高い結果といえよう。

Q11	出席率	4.78	4.82	0.21
Q12	授業理解への積極性	3.89	3.91	0.49
Q13	<総合評価> 総合評価（満足度）	4.17	4.25	0.56

2. 学部別の結果について

資料編に掲載した学部別の総合評価の結果を比較すると、三学部共に 4.00 以上で差が無いことが判明した。

	文学部	生活科学部	看護学部
平均値	4.11	4.41	4.04
中央値	4.19	4.54	4.29
標準偏差	0.59	0.53	0.50

また、次ページのアンケート 13 項目の平均値の結果において、「教員の熱意・意欲」「教員の準備・下調べ」の評価が高く、「教員の説明や指導の工夫」が低くなったことから大学全体と同様の傾向がみられた。特に、看護学部で顕著で、在籍者が 1、2 年生のみで、専門知識を学ぶ高卒後の学生に、医学的知識を多く教授しなければならないという学部の特殊性に影響されている可能性は高いが、教授方法の改善が求められることを示唆している。

設問 NO.	設 問 文	文学部	生活科 学部	看護学部
Q1	教員の熱意・意欲	4.34	4.54	4.33
Q2	教員の準備・下調べ	4.31	3.88	4.32
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.21	4.32	4.14
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.14	4.28	4.16
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.10	4.29	4.13
Q6	教員の説明や指導の工夫	3.97	4.11	3.86
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.16	4.28	4.17
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.10	4.18	4.12
Q9	教員の適切な言動	4.16	4.26	4.11
Q10	クラス規模の適切さ	4.24	4.26	4.12
	Q1からQ10までの平均	4.17	4.24	4.15
Q11	出席率	4.78	4.68	4.91
Q12	授業理解への積極性	3.88	4.02	3.77
Q13	<総合評価> 総合評価（満足度）	4.11	4.41	4.04

3 . 履修区分別の結果について

平均値、中央値ともに 4.10 以上であり、大差は無い。中央値と標準偏差からみて、生活科学部基礎科目、W 科専門科目、看護学部基礎科目では、学生の評価は高く、ばらつきも少ないと考えられる。

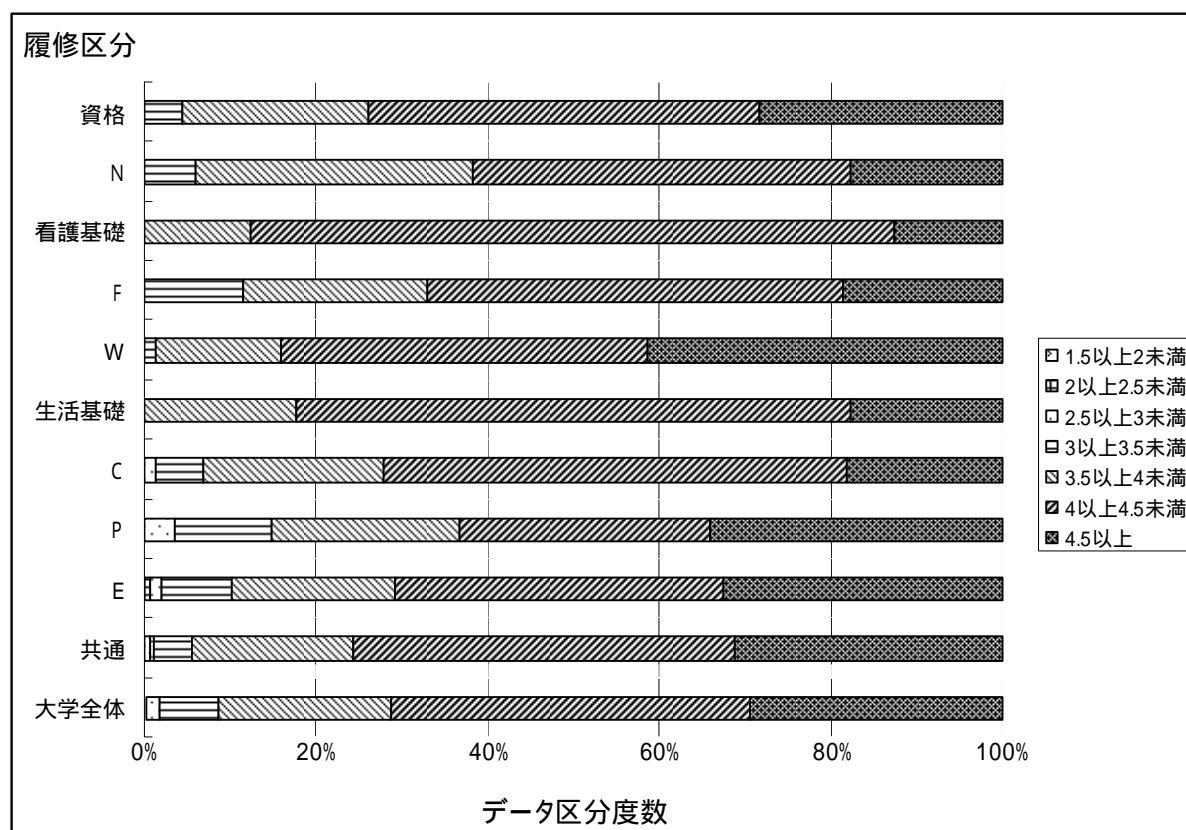
	平均値	中央値	標準偏差
大学全体	4.20	4.25	0.46
共通科目	4.24	4.28	0.45
E 科	4.21	4.33	0.50
P 科	4.15	4.19	0.53
C 科	4.14	4.16	0.39
生:基礎科目	4.26	4.35	0.34
W 科	4.39	4.45	0.37
F 科	4.10	4.18	0.44
看護:基礎科目	4.26	4.33	0.28
N 科	4.14	4.31	0.39
資格科目	4.26	4.27	0.40

なお、ここでいう平均値、中央値、標準偏差は、アンケート項目の Q11、Q12 を学生個々の問題として除外し、Q1～Q10 と Q13、すなわち計 11 問の結果を基に算出している。

データ区間	科目数	データ区間	科目数 (%)
1.5 以上 2.0 未満	1	1.5 以上 2.0 未満	0.1
2.0 以上 2.5 未満	1	2.0 以上 2.5 未満	0.1
2.5 以上 3.0 未満	11	2.5 以上 3.0 未満	1.4
3.0 以上 3.5 未満	61	3.0 以上 3.5 未満	6.9
3.5 以上 4.0 未満	175	3.5 以上 4.0 未満	20.2
4.0 以上 4.5 未満	360	4.0 以上 4.5 未満	41.8
4.5 以上	259	4.5 以上	29.5
実施科目数計	868	計	100

履修区別の平均値の分布について

履修区別では、生活科学部基礎科目、人間福祉学科専門科目、看護学部基礎科目において、平均点 4.0 以上の科目が 80% 以上を占めた。特に、生活科学部基礎科目、看護学部基礎科目では、対象の科目数が少ないものの、平均点 3.5 未満の科目は皆無であり、入学後間もない時期の 1、2 年生を対象に開講される学部基礎科目の評価が非常に高い傾向にあった。その意味では、3、4 年次に開講される資格科目や専門科目は難易度が高いために、それに応じた工夫がなされなければ、学生の評価平均値が下がる一因になる可能性もある。

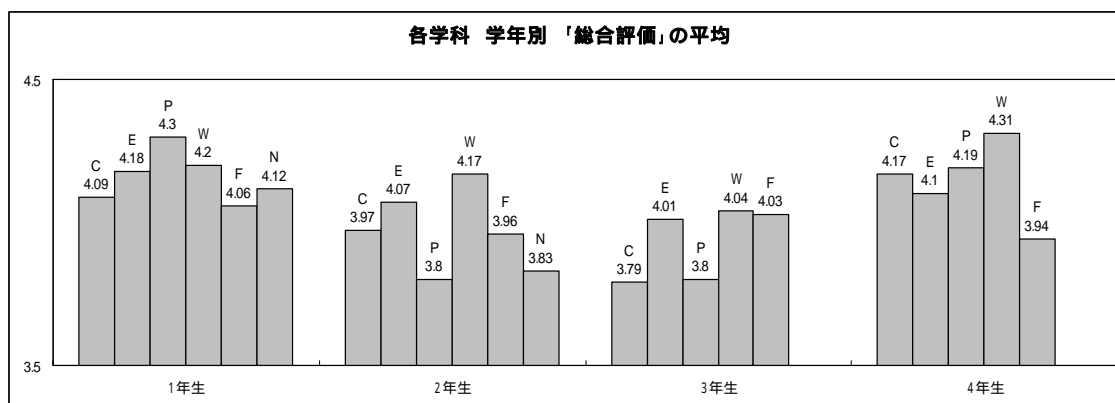


さらに、履修区別の平均値に関して、0.1 単位（データ区分）で分散を示した度数分布表を資料編に掲載した。

4. 各学科の学年別の結果について

受講生の学年別に評価結果を比較した。

全体的な傾向としては、1年生から3年生までその評価がなだらかに低下し、4年次に評価が回復する、いわゆる「V字ライン」の推移である。詳細については巻末の資料編に譲るが、このV字ラインの傾向を示すため、以下に各学科・学年別の「総合評価」平均値を示した。



この傾向は、ひとつには世代別エートス(その世代の雰囲気、思考傾向など)を反映したものとみることにも可能であるが、一般的にみて大学入学後、年を重ねるごとにモノの見方が成熟し、授業に対する要求も厳しくなり、卒業間近で少々感傷的になって評価が甘くなる、といった「年齢別傾向」を反映したものとみることが妥当であろう。いずれにせよその判断は今後の経年比較を待ちたい。

ただし学科別にみた場合、C科、E科、W科、P科は上述の通り3年生で底を打つV字型となっているが、F科の場合は4年生で底を打っている。F科に特有の事情(カリキュラム構成等)が関係している可能性もあるので、この点についても今後の経年比較の結果を待って判断することとしたい。

5. 教員所属別の結果について

いわゆる「常勤」の教員と「非常勤」の教員とで、授業評価の値に差異が生じるか否かを知ることは、今後の大学運営にとって重要である。ここでは「専任教員」と「兼任教員」(非常勤)の二つの所属区分(雇用形態)について平均値を比較した。

	専任教員	兼任教員	大学平均
問1～問10までの平均	4.15	4.11	4.14
総合評価の平均	4.09	4.03	4.07

結論から言えば、上記の全体的な数値、および全評価項目の数値とも、それほど大きな差異は生じなかった。あえて付記するとすれば、どれも僅かではあるが、全評価項目で専任教員の数値が兼任教員のそれを上回る結果となったことである。中でもQ8「勉学環境への配慮(私語の注意など)」についてはその差が最も大きい(0.12ポイント)。これを有意な値とみるか否かは判断の分かれるところだが、一般に専任教員に比して、兼任の教員は学生と接する機会が少なく、日々のコミュニケーションを授業運営に反映させる契機に恵まれていない。したがって今回の数値は、こうした一般的な事情にも関わらず、むしろ良好な結果とみるべきである。ただし兼任教員という雇用形態には、そもそもこうしたディスアドバンテージがつきまとうものであり、教員配置上、兼任の比率が高まること(非正規雇用に頼りすぎた体制になること)は、教員個々の努力のあり方如何に関わらず、学生の満足度を下げる可能性があることを、この数値から読み取れる教訓として注記しておきたい。

設問NO.	設 問 文	専任	兼任	大学平均
Q1	教員の熱意・意欲	4.32	4.29	4.31
Q2	教員の準備・下調べ	4.33	4.30	4.32
Q3	教員の質問や相談に乗る姿勢	4.13	4.11	4.12
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.15	4.12	4.14
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.14	4.11	4.13
Q6	教員の説明や指導の工夫	3.93	3.91	3.92
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.13	4.08	4.11
Q8	勉学環境への配慮(私語の注意など)	4.10	3.98	4.06
Q9	教員の適切な言動	4.14	4.12	4.13
Q10	クラス規模の適切さ	4.14	4.09	4.12
	Q1からQ10までの平均	4.15	4.11	4.14
Q11	出席率	4.73	4.68	4.71
Q12	授業理解への説教製	3.77	3.76	3.76
Q13	<総合評価> 総合評価(満足度)	4.09	4.03	4.07

6. 受講生数別の結果について

ここでは受講生の人数別に評価の平均値を比較した。

	50名以下	51～99名	100名以上
Q1～Q10までの平均	4.23	4.05	4.08
総合評価の平均	4.18	3.96	4.02
Q10の平均	4.36	3.98	3.75

一般的に「少人数の授業ほど満足度が高い」と言われるが、本学の場合も、「Q1～Q10までの平均」「総合評価の平均」とも、確かに「50名以下」の授業の評価結果が最も高くなっている。「クラス規模」を直接的に問うているQ10でも、人数が少なくなるほど評点が高くなっており、その増加幅も無視できないほど大きい。

しかしむしろここで注目すべきは、「51～99名」よりも「100名以上」の授業の評点（「Q1～Q10までの平均」「総合評価」）が上回っているという、逆転現象である。

Q10の結果のみを見れば、学生達自身は「少人数がいい」と判断していることがわかるが、学生達のこの「主観」は、他の評価項目全体の平均値を当然のことながら若干押し下いるにも関わらず、「少人数になるほど（主観的な満足度はともかく客観的な）評点が高くなる」という命題を証明するには至っていない。要するに100名以上の授業であっても、それより人数が少ない授業を上回る評価を得ている授業が多々あるということである。

確かにこうした「100名以上」の授業も、受講生がもっと少なければさらに評価が高くなった可能性はある（Q10で直接問うている限り、むしろ必ず高くなるだろうと思われる）。とは言っても、「受講生が多い」ということそのものは、担当者の努力によって十分に克服できる要素であるとも、同時に言えるだろう。

設問 NO.	設 問 文	50名以下	51名~ 99名	100名以上
Q1	教員の熱意・意欲	4.37	4.25	4.29
Q2	教員の準備・下調べ	4.34	4.27	4.38
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.25	4.01	4.02
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.22	4.05	4.12
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.20	4.03	4.19
Q6	教員の説明や指導の工夫	4.02	3.80	3.94
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.21	4.02	4.05
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.15	3.98	4.00
Q9	教員の適切な言動	4.19	4.07	4.12
Q10	クラス規模の適切さ	4.36	3.98	3.75
	Q1からQ10までの平均	4.23	4.05	4.08
Q11	出席率	4.72	4.71	4.69
Q12	授業理解への積極性	3.95	3.63	3.57
Q13	<総合評価> 総合評価(満足度)	4.18	3.96	4.02

7. 設問 とその他の設問との相関係数について

問13の「総合評価」の結果は、問1～問12までのどの項目ともっとも関係が深いのか。このことを示したものがいわゆる「相関係数」である。この係数は、1.00（100%）に近づけば近づくほど、双方の関係性が高くなることを示している。

2005年度の結果について、係数の高い順に設問項目を並べたものが下表である。

相関係数	設問項目
0.93	問06 教員の説明や指導の工夫
	問07 知識や技術の向上・視野の拡大
0.89	問03 教員の質問や相談にのる姿勢
	問05 テーマの明確化・筋道の通った展開
0.88	問04 授業概要やガイダンスとの一致
	問09 教員の適切な言動
0.83	問01 教員の熱意・意欲
	問02 教員の準備・下調べ
0.78	問12 授業理解への積極性
0.76	問10 クラスの規模の適切さ
0.70	問08 勉学環境への配慮
0.30	問11 出席率

予想されたことではあるが、「総合評価」の高い授業は、特に問6の「説明がわかりやすく指導に工夫がある授業」、そして問7の「知識や技術が向上し、視野が拡大したことを実感できる授業」ということになる。環境整備その他の外的な要因に影響はされるものの、基本的には教員個々の資質や努力のあり方が、「総合評価」を高くする大きな要因であるとひとまず結論できるものと思われる。

設問項目	問1 教員の熱意・意欲	問2 教員の準備・下調べ	問3 教員の質問や相談にのる姿勢	問4 授業概要やガイダンスとの一致	問5 テーマの明確化・筋道の通った展開	問6 教員の説明や指導の工夫	問7 知識や技術の向上・視野の拡大	問8 勉学環境への配慮	問9 教員の適切な言動	問10 クラスの規模の適切さ	問11 出席率	問12 授業理解への積極性	問13 総合評価(満足度)
問1 教員の熱意・意欲	1.00												
問2 教員の準備・下調べ	0.88	1.00											
問3 教員の質問や相談にのる姿勢	0.78	0.75	1.00										
問4 授業概要やガイダンスとの一致	0.80	0.84	0.82	1.00									
問5 テーマの明確化・筋道の通った展開	0.82	0.87	0.80	0.92	1.00								
問6 教員の説明や指導の工夫	0.82	0.83	0.88	0.87	0.88	1.00							
問7 知識や技術の向上・視野の拡大	0.81	0.81	0.85	0.86	0.87	0.91	1.00						
問8 勉学環境への配慮	0.75	0.71	0.64	0.66	0.68	0.68	0.72	1.00					
問9 教員の適切な言動	0.79	0.80	0.87	0.83	0.80	0.89	0.84	0.62	1.00				
問10 クラスの規模の適切さ	0.65	0.61	0.71	0.70	0.66	0.71	0.73	0.62	0.70	1.00			
問11 出席率	0.30	0.26	0.22	0.26	0.27	0.25	0.30	0.26	0.22	0.30	1.00		
問12 授業理解への積極性	0.65	0.61	0.72	0.70	0.70	0.74	0.76	0.61	0.64	0.65	0.32	1.00	
問13 総合評価(満足度)	0.83	0.83	0.89	0.88	0.89	0.93	0.93	0.70	0.88	0.76	0.30	0.78	1.00

(注)相関係数は、授業科目毎の平均値を用いて各設問間の単相関係数を求めた。

データ件数:937件

・ 学部長による教員報告書への概評

1. はじめに

各教員に通知された「学生による授業評価」データは、それぞれの教員が授業改善を行う際の資料である。同時に、今回の授業評価が有効であったのか否か、各教員が評価結果をどのように授業改善に役立てたのか、評価方法にどのような問題があるのかなどの問題を総合的に分析、検討する必要がある。授業改善をどのように行うべきかを大学全体の問題として考えなくてはならないからである。このような課題を解決するために、「授業評価結果」を受けてのご意見を報告していただきたいとの依頼文書を、2006年6月に各教員宛に配付した。ここでは、回答結果について報告するとともに学部長としての見解を記すこととする。

2. 方法と結果

表1に示す質問から構成されている報告書用紙を6月に配付し、7月10日までに学部長宛に回答するよう各教員に依頼した。このうち、**1**については2006年度の授業評価委員会に対し報告することとし、ここでは**1**と**2**について結果の概要をまとめる。

表1 報告書の質問内容

-
1. 今回の授業評価の結果（マークシート部分）は、今後の授業改善に役に立ちますか？
ア．はい イ．いいえ ウ．どちらとも言えない
理由)
2. 自由記述の内容で役に立つものがありましたか？（記述のあった方のみお答えください。）
ア．はい イ．いいえ ウ．どちらとも言えない
理由/内容)
今回の授業評価の集計結果を受け、感想および今後の授業に向けてのお考えを自由に記述してください
授業評価の方法や評価項目などについて、ご意見・ご要望がありましたら自由に記述してください。
-

1) 問「1」についての結果(マークシート部分の有用性について)

回答結果を教員の勤務形態、所属組織別（各学部、共通科目、兼任講師）に分類しまとめたものが表2である。勤務形態、所属組織による違いがほとんど見られないため、大学全体をまとめて分析する。まず、大学全体として60%程度の教員が役立ったと回答している一方、30%近くの教員が「どちらとも

「言えない」を選択している。その理由についてはさまざまな記載がある。ここでは、理由を分類しその一部を表3に示す。この表から、「はい」と回答している教員は必ずしも具体的記述がないものの何らかの形で役立ったと回答している。しかし、「いいえ」もしくは「どちらとも言えない」と回答した教員は、学生の態度、能力、クラスサイズ、評価項目の適切性に問題があることを指摘している。

表2 1の回答別割合[()人数] (%)

	はい	いいえ	どちらとも言えない	無答
文学部	58(22)	18(7)	24(9)	0(0)
生活科学部	60(12)	5(1)	30(6)	5(1)
看護学部	54(7)	0(0)	46(6)	0(0)
共通科目	57(4)	0(0)	43(3)	0(0)
兼任講師	66(39)	3(2)	31(18)	0(0)
大学全体	61(84)	7(10)	31(42)	1(1)

表3 1の回答別選択理由

- 「はい」を選択した理由
- ・学生が授業に対してどのように考えているかわかったため、弱い部分を見直して次年度に役立てられる。
 - ・授業の評価が高くなかった科目は準備不足の面があったと思われるので、参考になった。
 - ・大学平均でも低かったQ12の低かった科目に関して、今年度から学生自身で予習するような授業形態を取り入れるようにした。
- 「いいえ」を選択した理由
- ・授業内容への具体的な言及がないので。
 - ・受講者の学力に起因していると思われる問題点が多く、計画通りには展開できない授業も多いため。
- 「どちらとも言えない」を選択した理由
- ・レベルに大きな違いがあるため、全てに合わせるのは困難。
 - ・私の授業は資格に関わる科目のため受講者が多く、そのためか学生の受講姿勢に問題もあった。
 - ・授業サイズによる弊害が大きいのか、自分の授業の進め方が問題なのか不明な点。
 - ・同じ内容に授業であってもクラスによって評価に差がある。
 - ・質問項目が適切か検討が必要
 - ・評価ポイントを上げる役には直接的に役立つが、それが"授業改善"に結びつ

くかどうかは、科目そのものが持つ特性に大きく左右されると思われる。例えば、「私語の注意」に関して、aクラスとbクラスには有意な差異が見られるが、どちらも1年次必修の受講者であり、担当者としては同様な講義を行ったと考えている。また、本科目はその特性上、私語（例題、小テスト実施中の相談）を許しており、必要以上の注意はむしろ学生の意欲を欠く結果になると思われる。

2) 問「 - 2」についての結果(自由記述の有用性について)

回答結果を教員の勤務形態、所属組織別（各学部、共通科目、兼任講師）に分類しまとめたものが表4である。勤務形態、所属組織による違いがほとんど見られないため、大学全体をまとめて分析する。まず、大学全体として60%程度の教員が役立った記述があったと回答している一方、40%近くの教員が「どちらとも言えない」を選択している。その理由についてはさまざまな記載がある。ここでは、それを分類しその一部を表5に示す。この表から、「はい」と回答している教員は具体的記述をしていることがわかる。多くの回答は学生の具体的指摘に対応したことを示すものであった。また、一部には学生の言葉に励まされたとの記述もある。しかし、「いいえ」もしくは「どちらとも言えない」と回答した教員は、「記述がない」、「あっても具体的でない」、「学生のわがままや誤解がある」などの回答をしている。

表4 2の回答別割合[()人数] (%)

	はい	いいえ	どちらとも言えない	無答
文学部	55(21)	18(7)	24(9)	3(1)
生活科学部	45(9)	0(0)	40(8)	15(3)
看護学部	62(8)	0(0)	38(5)	0(0)
共通科目	57(4)	0(0)	43(3)	0(0)
兼任講師	59(35)	5(7)	53(12)	8(5)
大学全体	56(77)	10(14)	27(37)	7(9)

表5 2の回答別選択理由/内容

「はい」を選択した理由

- ・マイクを使ってほしい、板書をきれいに、など当方が気がつかなかった指摘はなるほどと思い、ただちに実行しました。
- ・授業そのものの評価以外に、受講生数の不適正（学生数が多すぎる）、不適切な教室に関する指摘があった。そのため、2006年度に関しては（教務部の協

力を得つつ)極力授業内容に合った、教室選びを図った。

・こちらの日本語が殆ど通じてなかったのがわかったので、後期にすこし工夫した。

・「きちんと出席をとってほしい」とか「私語や携帯(ケイタイ)の注意をしてほしい」などの希望が強くあることを知ることができた。

・好意的なコメントで勇気づけられた。改善すべき点が更に明確になった。

・授業の形態、講義か演習かなど学生の受け取り方があいまいな点のはっきりした。

・授業をすすめる速さと、内容に関してです。

・改善を要しないものが何かを確認できた。(良かった点を書いてくる学生が相当いた)

・意図せずして誤解を与える表現(というより説明不足の点)を確認できた。

・具体的に「~したら良い」という建設的な意見があった。

・学生の希望が具体的に分かったから。(板書を見やすくする、学生の発表に対する評価をその場でおこなうなど)

・学生参加型の授業形態に変更した。ただし、資格に関する科目では、内容が規定されている科目もありますから、なかなか学生の意に副うことはできませんが……

・普段は質問もしないのでわかったかどうか不明だった。

・自信がないため原稿を読みあげる部分が多く、下向きの授業になってしまったことを1名に指摘された。この点については自信のない部分については理解し暗記し学生の反応を確かめるよう改善した。

・声が聞き取りにくいという指摘があり、考慮必要だと思う、教室の大きさに対する人数の問題もあるかもしれない。

・高評価に励まされました。しかし、ほんの参考程度に考えています。

・「役に立った」「楽しかった」「知識が増えた」等の記述は励みになる。

「いいえ」を選択した理由

・考えられないような記述があったのが驚きです。

例)授業中トイレに行かせてくれない(小、中学生ではない)、いねむりさせてくれない。宿題が多い等

・あまり記述式を記入してくれた学生がいなかった。

「どちらとも言えない」を選択した理由

・ほとんど記述なし。あっても"役に立った"程度の内容

・個人的にとっているアンケートに書かれているもの以外はありませんでしたので。しかし、確認という意味は有ったかと考えております。

・プリントが役立ったとする記述とプリントが多すぎるという記述とがあった。

・要望というよりわがままとしか受け止められない記述もあった。例えば、資料の大きさを統一してほしいなど。

・板書の仕方など納得のいく指摘があった。一方でただ「つまらない」という指摘では、改善を考えようがない。(マークシート部分では平均を上回っている)

・受講人数について:実習を伴うものは、受講人数が多いのですが、学生も私

自身も同じ考えですが、どうにもなりません。（私の力では改善できません）
・ドイツ語には、ドイツ語文法で最も難解な非現実話法などが出てくるせいか、学生の理解度にどうしても大きな差が生じることになる。それで「ドイツ語はむずかしいのに楽しくできた」という感想がある一方、「わかった、わからないのは誰が基準になるのか」といった意見もあった。この、第二外国語の学習が常にはらんでいる「いつの間にかできてしまった理解度の大きな差」という問題をどうすればいいのか、改めて考えさせられた。（私の場合、試験の前に特に理解度の落ちる学生を集めて補習を実施しているが、それに出ている者も結局 F になってしまう者がいる。また、それにすら出てこない者もいる。そうした学生のことを考えると、そろそろ第二外国語の選択必修をはずす時期になっているようにも思える。）

・私個人へのラブレターのようなものが多く、授業の内容についての知的な感想がなかったので、がっかりしました。ドイツ語の授業の速度が速すぎるという指摘がありましたが、「ゆっくり」すすめることの意味は考えました。

・記述の多くは概ね感謝の言葉が占めていたが、1点、講座（パソコンの講座）に次のような記述があった。「問題を解くのをそれぞれの生徒に任せ全体的な指導は全くしなかった。自習しているものと変わらなかった。授業とは思えない内容だった。出ても出なくても変わらなかった。」本演習はシラバスでも資格講座を謳っており、ガイダンス時にも「基本的に自習形式、分からないところは質問を。全体の状況に応じて全体へのレクチャーを行う。」と述べており、多くの学生は概ね積極的に学習しており、自由記述にも感謝や本形式を絶賛する言葉もある。しかしその一方、一部（特に男子学生）には、自ら学習する意欲に欠けるものがあり、このような記述となって現れたものと思われる。

3) 問「 」についての結果(感想・意見について)

問「 」については、ほとんどの教員が何らかの記述をしており、そのためすべての回答を示すことは難しい。そこで、内容を分類しその概要を報告するにとどめる。

まず、問「 」でも指摘したように、授業改善の資料になったことを指摘する回答がたくさん報告されている。主要な意見は、授業改善に役立ったことを記述したもの、学生の行動、能力などについての記述、カリキュラム等の授業環境の問題点を指摘したもの、評価方法それ自体についての記述に分類することが可能である。

まず、授業改善の役に立ったということについては、質問「 」と同様に具体的なことを記述したものとそうでないものがあった。出席カードなどに学生の質問・意見・感想を書いてもらうようにした、低かった項目を改善するようにした、専門領域を広げた、授業目標を下げたなどの意見があった。

学生の行動、能力については、常識が通じない、日本語能力に問題がある、出席しない学生からの辛らつな評価、わかりやすくすることでレベルが下がるのではという不安が指摘されている。

カリキュラム等の改善については、すでに言われていることであるが 100 名

を超える授業での私語の問題、資格科目の合格率を上げることの難しさについて悩んでいることがわかった。

評価方法それ自体については、すでに個人でアンケートを取っている、個人アンケートの方が有効である、オムニバスの授業評価が難しい、アンケート項目から授業改善を図るのは難しいなどの意見が寄せられている。

また、今後の授業改善のために継続的に授業評価を行うべきである、学科あるいは教科ごとにチームを作り改善することが必要である、外部への説明責任を果たすためにも授業評価が必要であるとの意見があった。

3. 報告書への概評

教員からの報告書の回答を見て、問題点を指摘するとともに授業改善についての見解を述べたい。

まず、2005年度授業評価委員会のメンバーに対し、約2年にわたる準備、実施、報告書の作成など多くの仕事に時間を割いてきたことに感謝申し上げたい。また、報告書に回答を寄せられた教員各位にもお礼申し上げたい。本学における学生による授業評価の試みはまだ始まったばかりで、さまざまな問題を抱えていることはいうまでもないことである。しかし、授業評価が実施され、教員から報告を寄せていただいた以上、その情報を生かして今後の授業改善に向けた一歩とすることは必要なことといえる。ここで、さらなる授業改善のために、現時点で考えなくてはならない問題は何かを指摘しておくこととしたい。

1) 教員の改善努力すべきこと

今回の報告書を見て、「役立った」とする教員が60%程度いたことは、授業評価の有効性が示されたことになる。それぞれの教員が授業改善に向けた努力をしていると考えるが、どのように役立ったのか、どのように改善したのかについて具体的に記載したものは必ずしも多くなかった。「板書の仕方を改善した」、「学生の意見を書いてもらうようにした」などと具体的に改善方法を報告している教員は一部であった。学生からの具体的指摘によって授業改善を図ったものと考えられ、学生からの具体的指摘の重要性がわかる。各教員は、学生から授業に関する具体的情報を日常的に得る必要があるといえるだろう。ただ、1年間の授業計画などの評価・改善は今回行ったような評価方法では難しいかもしれない。

2) 大学として改革すべきこと

今回の教員からの報告書には、教育環境の改善を求める意見があった。すでに言われているが、大人数の講義を少なくする努力が必要となる。また、資格科目と資格を取らせるための授業の難しさが指摘されている。試験対策のような講義を多くすることは、大学教育の改善という点から言えば必ずしも望ましいとは言えないだろう。事実の記憶を中心とする学習、プロセスより結果を重視する学習、またそれを助長する授業が果たして学生の真の教育になるのかを問わなければならない。この点についての授業改善、授業評価を今後検討する必

要があるう。

3) 学生が抱える問題

勉強をしない学生、授業中の態度が問題である学生など学生自身が改善しなくてはならない問題がある。これもすでに指摘されていることであるが、基礎学力をつけるための教育改善、学生のマナー改善の取り組みが必要となる。

4) 授業評価の方法

学生による授業評価アンケート項目の適切性については、いくつかの問題のあることが指摘されている。この改善については 2006 年度の授業評価委員会で検討していただきたい。

5) 授業改善のシステム

結果に基づく改善をどのように行うか、大学全体として誰がどのように何を管理するのは重要であるが難しい問題である。たとえば、すでに個人でアンケートを取って授業改善をしている教員にとっては、今回の授業アンケートは満足できないものであったといえるだろう。新たな情報が付け加わったわけではないからである。今後は、教員相互による授業改善情報の交換を進めたり、授業を相互に見たりすることが必要ではないかと考える。同一学科内もしくは同じような授業を担当している教員間で授業改善の話し合いを進めていくことが必要ではないだろうか。

6) 教員の評価

今回の学生による授業評価は、教員評価なのか授業評価なのかという疑問をもった教員がいる。その点は確かにあいまいであるが、両方の要素を含んでいることは確かである。教員を評価するのであるならば、授業評価のみならず、研究業績の評価、学内でのさまざまな業務にどの程度関わっているのかの評価についてもあわせて行う必要があるだろう。また、授業評価であるならば、授業評価方法の改善、結果の利用方法の検討など多くの改革を進める必要になる。

7) 評価に関わるコストと効用

授業評価を行うことは多く事務処理と費用が必要になる。一部の教員がその事務処理に多くの時間を注ぎ、その結果として授業の準備時間が少なくなるようでは本末転倒ではないだろうか。授業評価に関わるコストと効用を考慮に入れて授業改善に取り組む必要がある。

以上のような問題を指摘し学部長としての見解を述べることで、報告書を読んだ概評としたい。

文学部長	高橋	教雄
生活科学部長	立木	徹
看護学部長	山崎	京子

. 資 料 編

1. 学部別の平均値・中央値・標準偏差

<文学部>

設問 NO.	設 問 文	平均値	中央値	標準偏差
Q1	教員の熱意・意欲	4.34	4.43	0.47
Q2	教員の準備・下調べ	4.31	4.42	0.49
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.21	4.29	0.59
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.14	4.20	0.52
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.10	4.20	0.58
Q6	教員の説明や指導の工夫	3.97	4.10	0.66
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.16	4.25	0.55
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.10	4.18	0.54
Q9	教員の適切な言動	4.16	4.27	0.62
Q10	クラス規模の適切さ	4.24	4.29	0.48
	Q1からQ10までの平均	4.17	4.26	0.55
Q11	出席率	4.78	4.81	0.17
Q12	授業理解への積極性	3.88	3.90	0.48
Q13	<総合評価> 総合評価（満足度）	4.11	4.19	0.59

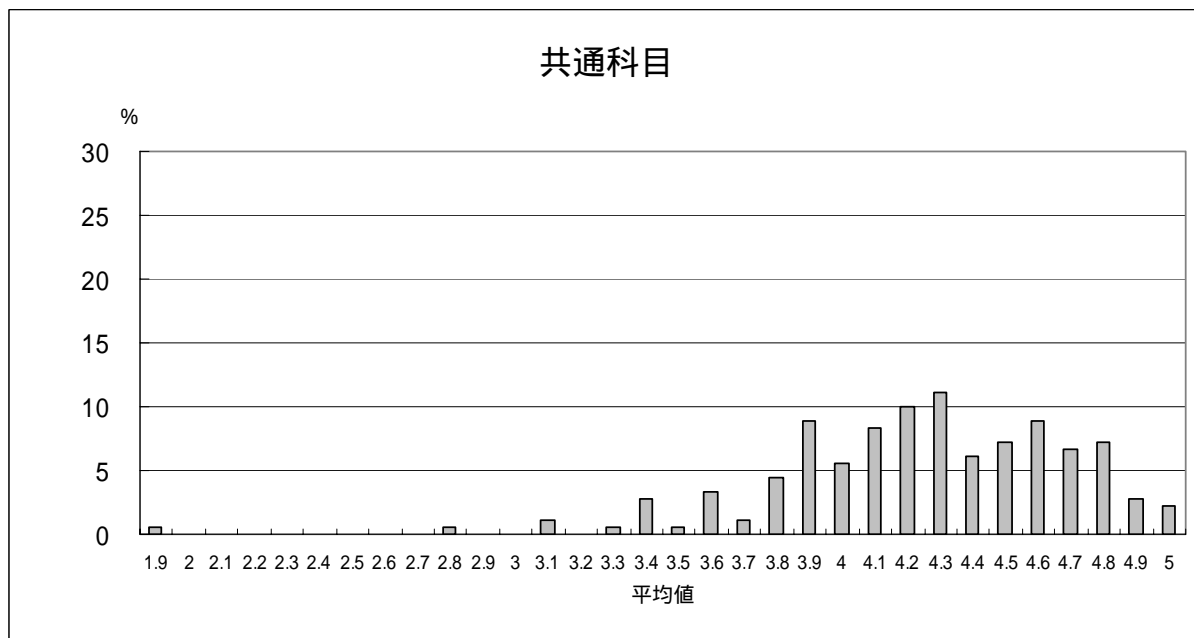
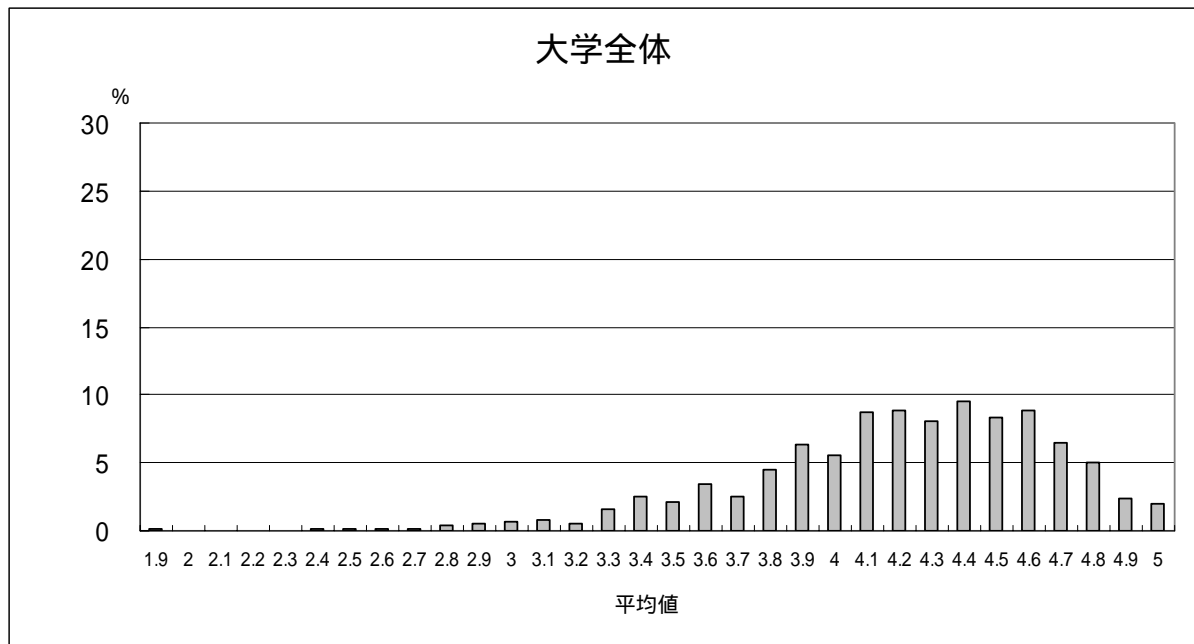
< 生活科学部 >

設問 NO.	設 問 文	平均値	中央値	標準偏差
Q1	教員の熱意・意欲	4.54	4.70	0.48
Q2	教員の準備・下調べ	3.88	4.23	1.05
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.32	4.41	0.51
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.28	4.36	0.47
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.29	4.37	0.52
Q6	教員の説明や指導の工夫	4.11	4.23	0.58
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.28	4.39	0.54
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.18	4.26	0.53
Q9	教員の適切な言動	4.26	4.33	0.49
Q10	クラス規模の適切さ	4.26	4.27	0.45
	Q 1 から Q 1 0 までの平均	4.24	4.36	0.56
Q11	出席率	4.68	4.79	0.37
Q12	授業理解への積極性	4.02	4.00	0.54
Q13	< 総合評価 > 総合評価（満足度）	4.41	4.54	0.53

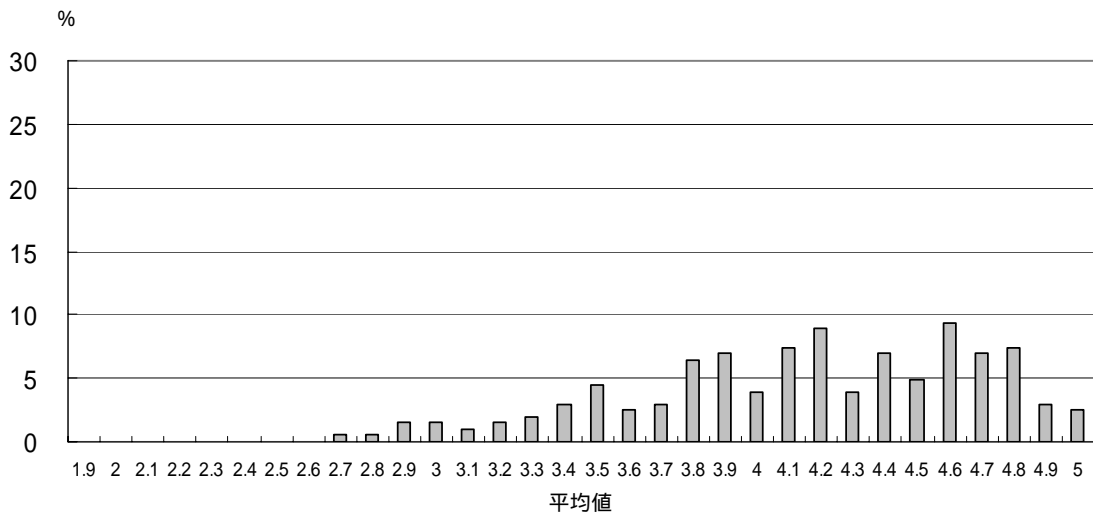
<看護学部>

設 問 NO.	設 問 文	平均値	中央値	標準偏差
Q1	教員の熱意・意欲	4.33	4.48	0.38
Q2	教員の準備・下調べ	4.32	4.44	0.35
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.14	4.19	0.45
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.16	4.21	0.37
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.13	4.29	0.44
Q6	教員の説明や指導の工夫	3.86	4.07	0.54
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.17	4.33	0.47
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.12	4.16	0.40
Q9	教員の適切な言動	4.11	4.25	0.43
Q10	クラス規模の適切さ	4.12	4.16	0.28
	Q 1 から Q 1 0 までの平均	4.15	4.26	0.41
Q11	出席率	4.91	4.93	0.05
Q12	授業理解への積極性	3.77	3.82	0.43
Q13	<総合評価> 総合評価（満足度）	4.04	4.29	0.50

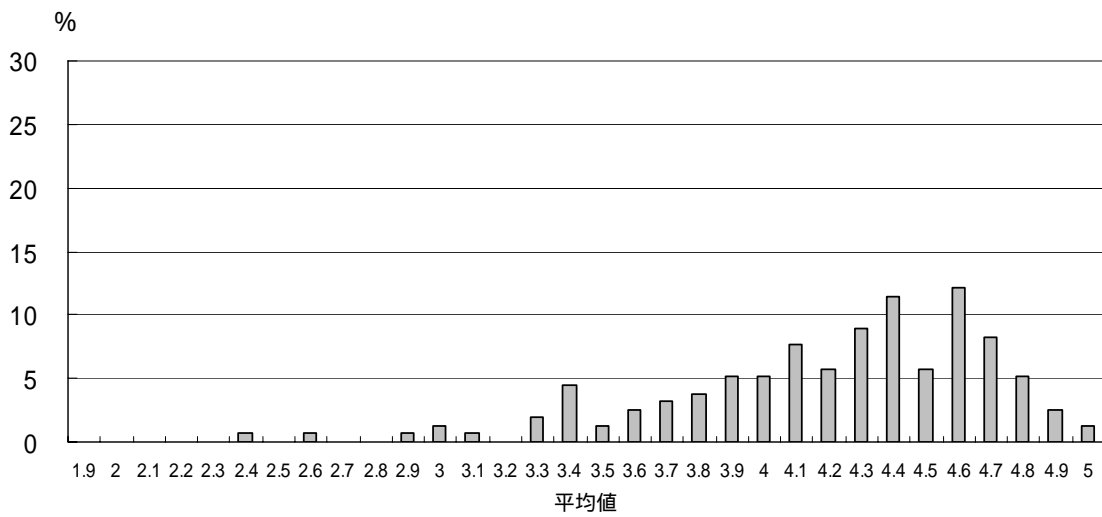
2.履修区分別の総合評価の度数分布表



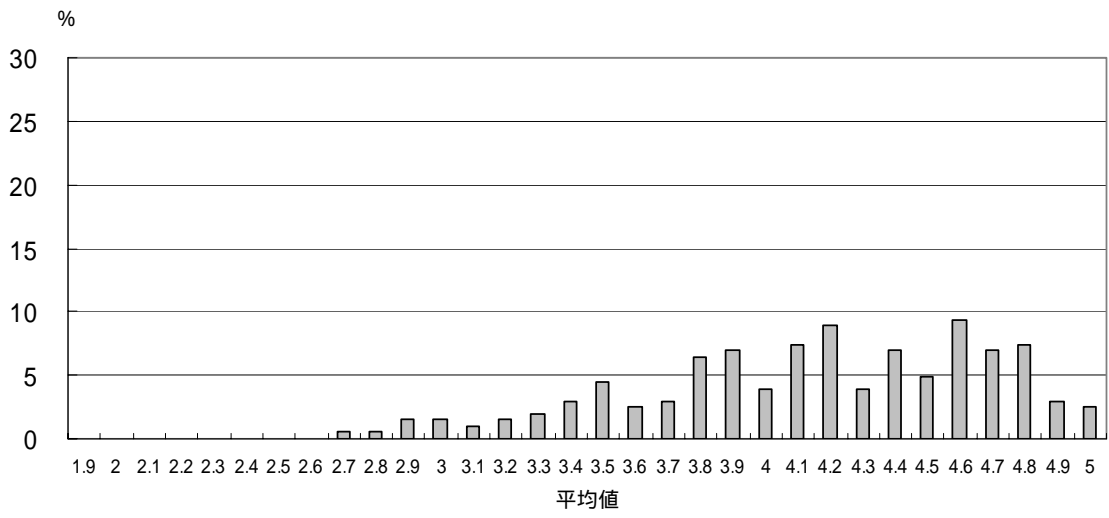
C科(文化交流学科)



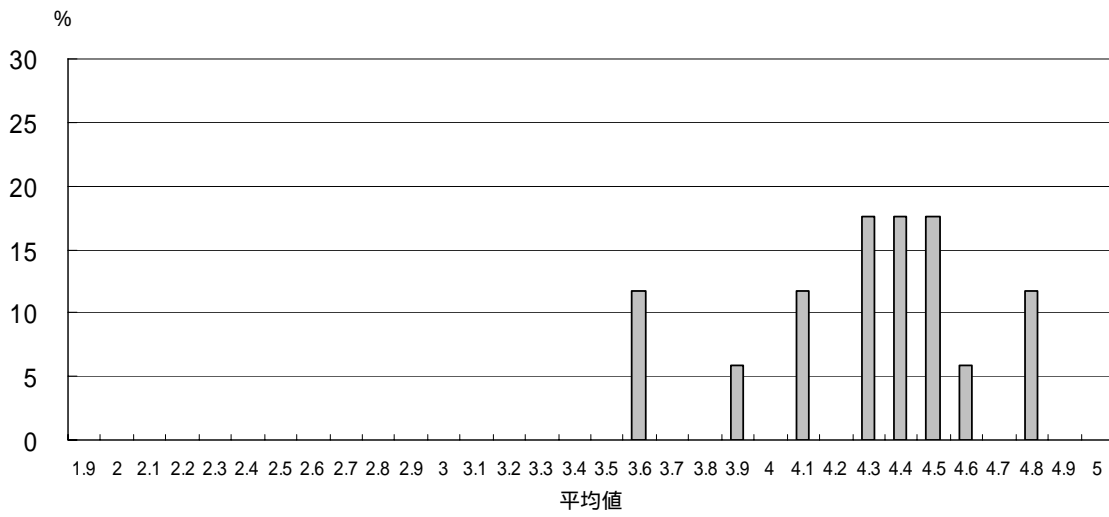
E科(現代英語学科)



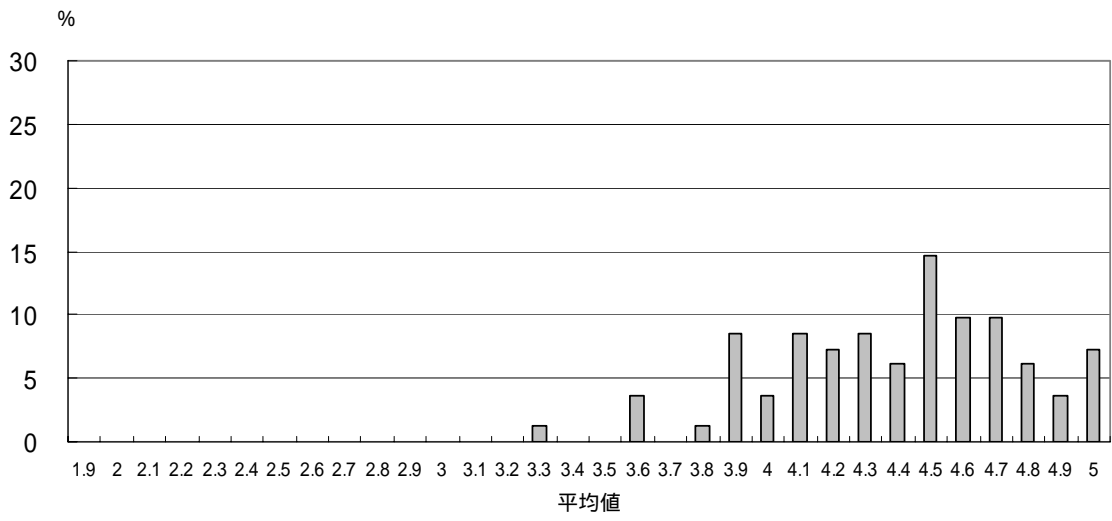
P科(児童教育学科)



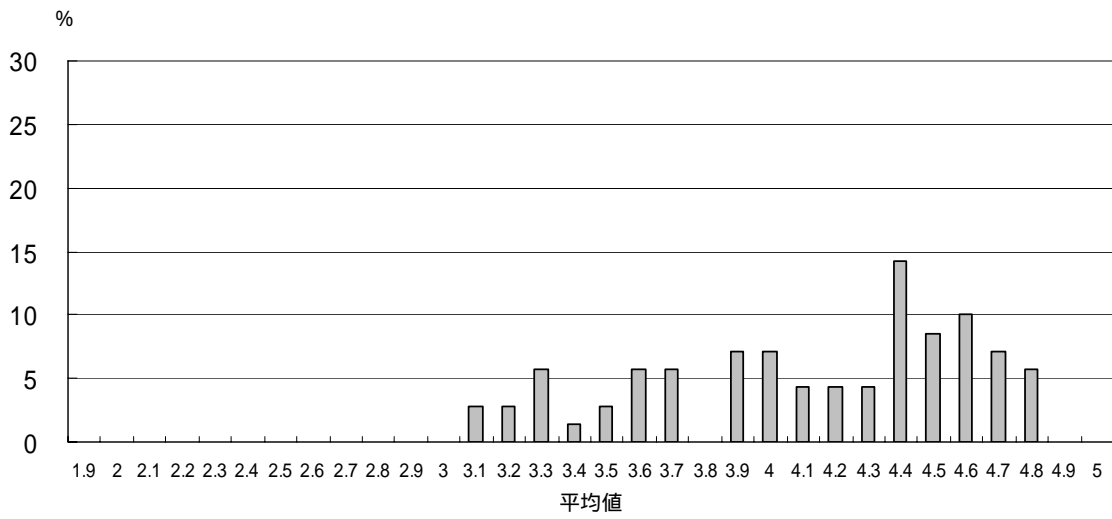
生活科学部基礎科目



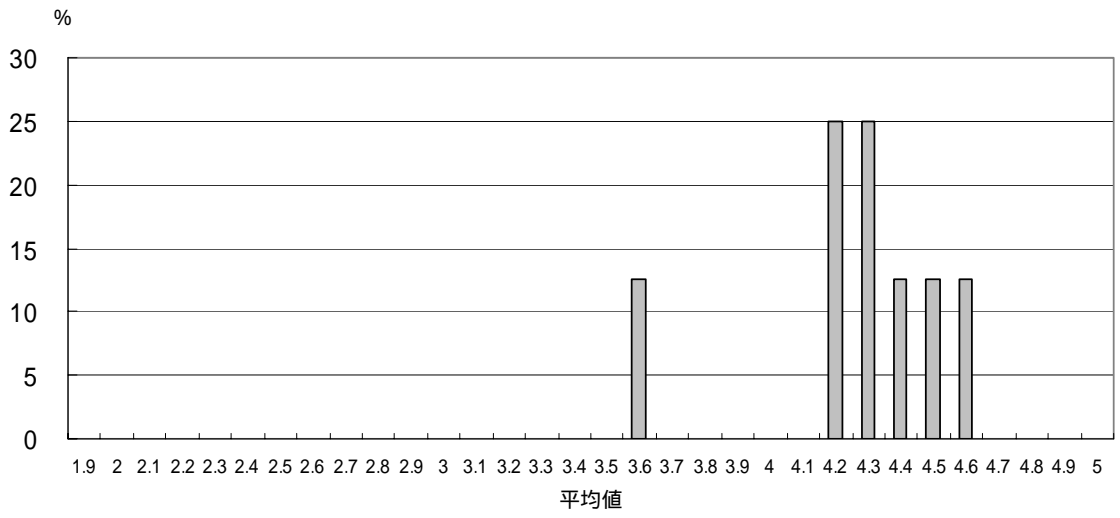
W科(人間福祉学科)



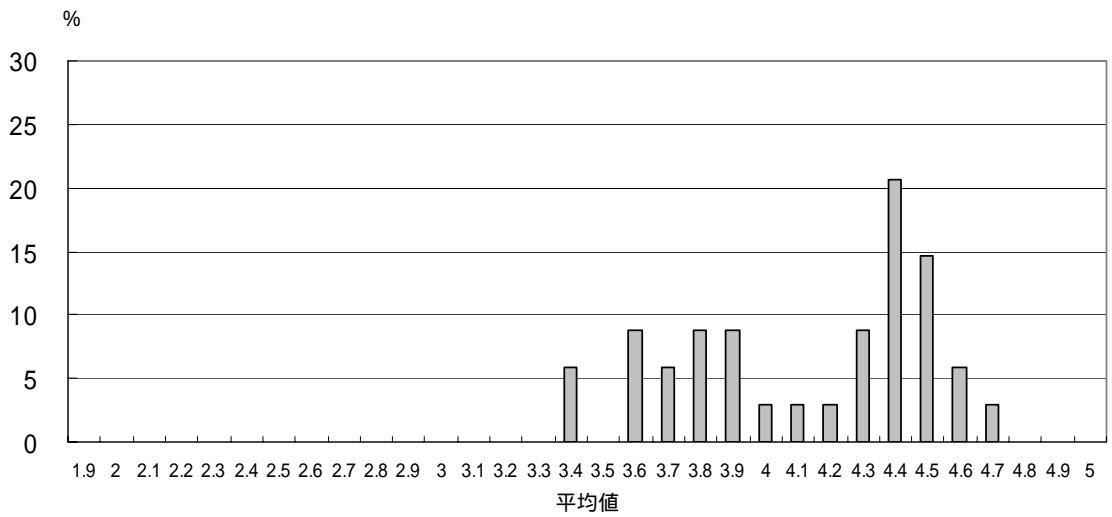
F科(食物健康科学科)



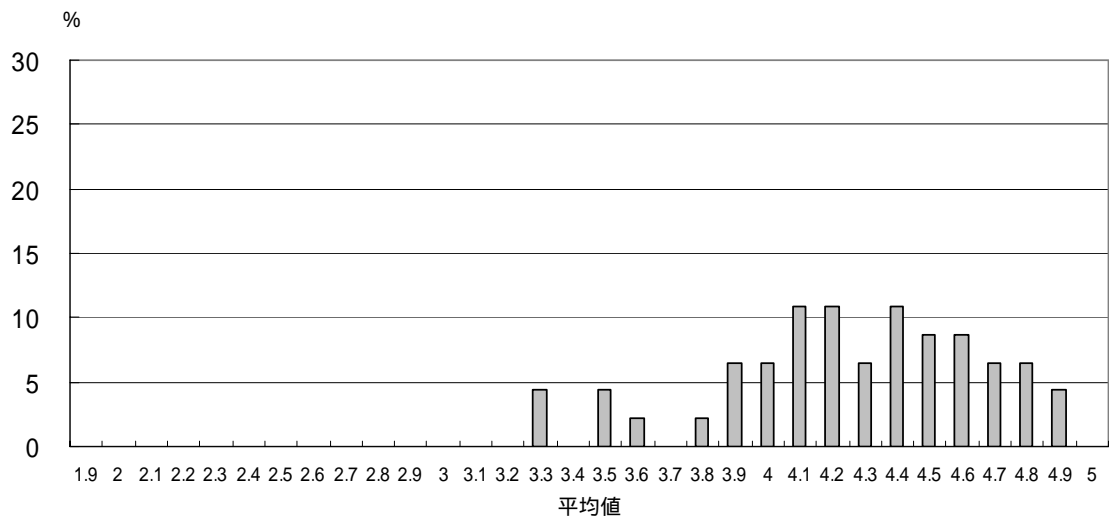
看護学部基礎科目



N科(看護学科)



資格科目



3. 各学科の学年別の結果

<文化交流学科>

設問 NO.	設 問 文	C 1	C 2	C 3	C 4	C全体
Q1	教員の熱意・意欲	4.40	4.34	4.28	4.38	4.35
Q2	教員の準備・下調べ	4.34	4.35	4.32	4.42	4.35
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.10	3.96	3.86	4.19	4.01
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.14	4.10	4.04	4.24	4.12
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.14	4.01	3.95	4.19	4.06
Q6	教員の説明や指導の工夫	3.93	3.79	3.71	4.08	3.86
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.07	3.89	3.94	4.29	4.03
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.19	4.03	3.82	4.02	4.02
Q9	教員の適切な言動	4.10	4.05	3.99	4.24	4.08
Q10	クラス規模の適切さ	4.21	4.06	3.78	4.08	4.03
	Q1からQ10までの平均	4.16	4.06	3.97	4.21	4.09
Q11	出席率	4.74	4.60	4.68	4.45	4.65
Q12	授業理解への積極性	3.84	3.42	3.34	3.75	3.59
Q13	<総合評価> 総合評価（満足度）	4.09	3.97	3.79	4.17	3.99

< 現代英語学科 >

設問 NO.	設 問 文	E 1	E 2	E 3	E 4	E全体
Q1	教員の熱意・意欲	4.42	4.35	4.40	4.38	4.39
Q2	教員の準備・下調べ	4.34	4.33	4.38	4.38	4.35
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.36	4.23	4.14	4.18	4.26
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.23	4.11	4.13	4.29	4.18
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.21	4.11	4.05	4.12	4.14
Q6	教員の説明や指導の工夫	4.08	4.02	3.92	4.02	4.02
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.17	4.07	4.05	4.19	4.12
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.18	4.11	4.07	4.01	4.13
Q9	教員の適切な言動	4.23	4.17	4.21	4.26	4.21
Q10	クラス規模の適切さ	4.19	4.17	3.94	3.97	4.11
	Q1からQ10までの平均	4.24	4.17	4.13	4.18	4.19
Q11	出席率	4.80	4.55	4.56	4.24	4.63
Q12	授業理解への積極性	4.05	3.87	3.69	3.68	3.89
Q13	<総合評価>総合評価（満足度）	4.18	4.07	4.01	4.10	4.10

< 児童教育学科 >

設問 NO.	設 問 文	P 1	P 2	P 3	P 4	P全体
Q1	教員の熱意・意欲	4.49	4.21	4.03	4.36	4.29
Q2	教員の準備・下調べ	4.52	4.19	4.04	4.42	4.30
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.31	3.92	3.78	4.30	4.06
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.36	4.03	3.81	4.32	4.13
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.39	4.01	3.78	4.21	4.12
Q6	教員の説明や指導の工夫	4.15	3.80	3.51	4.02	3.89
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.35	4.01	3.81	4.27	4.12
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.26	3.94	3.72	4.00	4.03
Q9	教員の適切な言動	4.27	4.01	3.86	4.25	4.09
Q10	クラス規模の適切さ	4.33	4.15	3.99	4.12	4.19
	Q1からQ10までの平均	4.34	4.03	3.83	4.23	4.12
Q11	出席率	4.78	4.72	4.72	4.52	4.74
Q12	授業理解への積極性	4.09	3.51	3.51	3.70	3.82
Q13	< 総合評価 > 総合評価（満足度）	4.30	3.80	3.80	4.19	4.07

<人間福祉学科>

設問 NO.	設 問 文	W 1	W 2	W 3	W 4	W全体
Q1	教員の熱意・意欲	4.31	4.38	4.22	4.39	4.32
Q2	教員の準備・下調べ	4.37	4.37	4.32	4.47	4.37
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.11	4.23	4.07	4.37	4.16
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.16	4.27	4.18	4.43	4.22
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.25	4.24	4.20	4.39	4.25
Q6	教員の説明や指導の工夫	4.01	4.03	3.89	4.20	4.01
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.24	4.21	4.10	4.44	4.22
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.18	4.11	3.92	4.20	4.11
Q9	教員の適切な言動	4.19	4.22	4.09	4.34	4.19
Q10	クラス規模の適切さ	4.16	4.13	4.03	4.22	4.13
	Q1からQ10までの平均	4.20	4.22	4.10	4.34	4.20
Q11	出席率	4.77	4.61	4.61	4.52	4.67
Q12	授業理解への積極性	3.88	3.71	3.55	3.73	3.75
Q13	<総合評価> 総合評価（満足度）	4.20	4.17	4.04	4.31	4.17

< 食物健康科学科 >

設問 NO.	設 問 文	F 1	F 2	F 3	F 4	F全体
Q1	教員の熱意・意欲	4.24	4.20	4.14	4.20	4.21
Q2	教員の準備・下調べ	4.28	4.25	4.22	4.25	4.26
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.11	4.02	4.16	4.20	4.10
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.14	3.96	4.06	4.10	4.06
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.16	4.03	4.07	3.98	4.09
Q6	教員の説明や指導の工夫	3.88	3.83	3.87	3.83	3.86
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.09	4.00	4.02	3.99	4.04
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.08	3.96	3.97	3.95	4.00
Q9	教員の適切な言動	4.09	4.12	4.09	4.17	4.11
Q10	クラス規模の適切さ	4.16	3.96	4.14	4.12	4.09
	Q1からQ10までの平均	4.12	4.03	4.08	4.08	4.08
Q11	出席率	4.83	4.81	4.79	4.61	4.79
Q12	授業理解への積極性	3.84	3.56	3.56	3.39	3.66
Q13	< 総合評価 > 総合評価（満足度）	4.06	3.96	4.03	3.94	4.01

<看護学科>

設問 NO.	設 問 文	N 1	N 2	N 3	N 4	N全体
Q1	教員の熱意・意欲	4.37	4.17			4.30
Q2	教員の準備・下調べ	4.35	4.18			4.29
Q3	教員の質問や相談にのる姿勢	4.15	3.94			4.08
Q4	授業概要やガイダンスとの一致	4.18	3.99			4.11
Q5	テーマの明確化・筋道のとった展開	4.19	3.96			4.11
Q6	教員の説明や指導工夫	3.94	3.65			3.84
Q7	知識や技術の向上・視野の拡大	4.21	3.96			4.12
Q8	勉学環境への配慮（私語の注意など）	4.16	3.91			4.07
Q9	教員の適切な言動	4.18	3.92			4.09
Q10	クラス規模の適切さ	4.11	4.01			4.07
	Q1からQ10までの平均	4.18	3.97			4.11
Q11	出席率	4.87	4.80			4.84
Q12	授業理解への積極性	3.77	3.63			3.73
Q13	<総合評価> 総合評価（満足度）	4.12	3.83			4.02

2005年度 学生による「授業改善のためのアンケート」結果報告書

2006年12月20日 発行

編集・発行 茨城キリスト教大学授業評価委員会

細谷瑞枝

池内耕作

坂江千寿子

渡辺敦子

銭谷秋生(委員長)

代表

瀧野 修

〒319-1295 茨城県日立市大みか町 6-11-1

:0294-52-3215